

# 中世文化の基調

平 泉 澄

近代第一流の數學者にして且偉大なる物理學者であつたアンリ・ポアンカレは、その名著「科學の價值」の緒論に於いて、劈頭第一に左の如く喝破した。

真理の發見、これが吾人の活動の目的でなければならぬ。吾人が活動の目的とするに値するもの此外には無い。疑も無く吾人は先づ人生の苦痛を輕減する事を努めなければならぬ。併し其は何の爲めか。……吾人が益々人類をして物質的に不安を脱せしめよう欲するものは、一に斯くして恢復せられた自由を真理の研究に考察に用ゐるが爲めである」(田邊元博士の譯文による)

氏に従へば、真理の外に美はしきものはなく、真理の發見以外に、我等が目的とする價值あるものはないのである。而して氏が此處に眞理と呼ぶ所

のものは、専ら科學的眞理に外ならぬ事は、氏が特に加へたる註解によつて明かである。(氏が同時に道德を之に併行せしめんとする意見は、別に考察を要する事としてこゝには之を省く。)

疑もなくポアンカレの此の言は、近代精神の卒直にして大膽なる一の表現である。今や科學は其の全盛を極め、他の一切の文化財を足下に蹂躪し昂然として文化價値の王座を占めてゐる。而してたゞに數學や物理學等の純正科學のみにとゞまらず、一切の文化に對し、科學的方法による研究を加へ、科學的解釋を下さんとしつつある。その傾向の極端に走り、その勢の激する所、所謂社會科學の主張を見る。彼等は所謂マルクス主義を奉じ

經濟關係を以て一切社會現象の基礎と斷じ、政治も法律も、文學も美術も、哲學も宗教も、悉くこれ經濟關係に依つて成立し、又變形する所の影に過ぎずとし、而して歴史に對しては、一に經濟關係によつて生ずる不斷の階級闘争なりと觀するるのである。

しかるに斯くの如き見解は、科學の萬能を信じ科學の全盛に酔ふ現代の特徴であり、或はその餘沫に過ぎざるものであつて、そのいふ所には幾多の眞理を含み、又清新なる示唆に富むとはいへ、之を以て唯一の解釋となし、絶對の眞理なりとなす事は出來ない。時代は推移する。而して時代時代によつて人生觀は異なり、その要望する對象は異なり、その目的に向つての努力は異なる。昨の是とした所、既に今の非なるを知つたならば、今の是とする所、やがて明の非なるを考へなければならぬ。昔は山鹿素行、謫居童問にこの理を説

いて曰く、

「古今相隔リ風俗大ニ違フ、大概百年ニ世間大變ス、五十年ニ中變ス、コレヲ不考シテ、數十歳已前ノ事ヲ取テ今日ニ合セントスル事大ナル誤也。但シ變ゼザル事ト變ズルコト、損益ノ道アルコトナリ、是實智キマラザレバ不可知、」

古今文化の相違を仔細に吟味し、人心の歸趣を深刻に検討し來れば、ポアンカレが科學的眞理の絶對價值説すら、猶一時代の熱狂と觀られないでは止まぬ。況んやマルクス主義の危激極端の論に於いておや。

予は先きに我國文化史の上に現るゝ時代精神の相違を指摘し、古代の純より始めて、上代が美を中世が聖を、近世が善を、現代が眞を、それ／＼最高の文化價值と爲す事を概論し、日本精神發展の段階を略説した。（史學雜誌昭和三年月號）こゝには現代より溯つて中世に及び、専ら中世文化の基調を説かう。蓋し時代々々の價值批判、價值要望、乃至價

値實現の相違を明かにする事は、文化史の眞の理解の爲にも、やがて亦現代批判の上にも、最も必要なる事であるからである。

今や多くの史家は虚心に歴史事實を採取せんと努め、一部の間に於いては、歴史事實を専ら經濟的に説明せんとし、而して極端なる一派の論者は歴史を一に經濟關係による階級の闘争なりと観るしかるに少しく溯つて近世に戻れば、史家の態度は全く之と異なる。彼等は歴史に於いて、つとめて名分を正し。綱常を立てんとした。而してその事實を描寫するにも、一見して善惡の自ら明かならん事を努めた。徳川綱條が大日本史の序に、先人光圀の言を記して

「史者所以記事也、據事直書、勸懲自見焉、……善可以爲法、惡可以爲戒、而使亂賊之徒知所懼、將以裨益世教、維持綱常」

といひ、安積澹泊が平玄中に與へた書に大日本史

を賛して、

「序中所謂亂臣落膽、倭覬覦之心、賊子踟躕、不王之迹掃地焉者、至此方可庶幾也、」

と述べたもの、實に之が代表である。

しかしながら斯の如き倫理的褒貶は、中世の史家が望むところではなく、従つて倫理的見地より見れば、中世の史書は取るに足らざるものであつた。現に三宅觀瀾は、保建大記の序に於いて、中世の史書のいふに足らざるを説いて、

「詞理俚淺、敷衍摻雜、眞僞俱昧、要之朝報史案而已矣、傳奇小説而已矣、是其叙事且不成體、尙奚在能勸善懲惡以衰鉞百代也、」

といつてゐる。但しこれは近世の見解による批判であつて、倫理的褒貶を主とする點よりいへば斯の如く無價値であるとはいへ、中世の史家に於いては之を外にして、自ら獨自特異の立場なしとしない。今近世的傾向を聚樂物語に窺ひ、而して中

世的態度を保曆問記に見れば、實に左の如き著しきコントラストを發見する。

聚樂物語の序説にいふ、

「朝にさかへ夕におころふるは、みな是世間のならひ國をおさめ天下をたもつも、其身の賢愚にあらず、天よりあたへ給ふこいひながら、君臣の禮義を失ひ、父子の慈孝なき時は、必其家ほろぶ、君臣に禮をなす時は、臣又君に忠を盡し、父は子に愛をなし、子は父に孝をなす時は、身治り家齊て、かならず其國さかふこ見えたり、爰に前の關白秀次公は、伯父太閤秀吉卿の重恩をわすれ給ひて、あまつさへ逆心をふくみ給ひしかば、天罰いかでのがれたまふべき、御身をほろほし給ふのみならず、多くの人をうしなひ給ふ御心の程こそあさましけれ、」

之に對して保曆問記の末に説く所はかうである。

「是ヲ見テ無常菩提心ヲ發サ、ル事ハ口惜カルベキニヤ、然ルニ自元釋門ニ入ル族、多ハ還俗スル事アリ、昔ハカ、ルタメシハ痛ク聞不及、……只是ヲ思ニ、執着ノヤマザル故也、サレバ此心ヤマズシテ、我モ人モ空ク月日ヲ送テ、罪業ノ種ヲ三途ノ舊里ニ殖、業報

ノ罪難遁、何ニモ此念難留ケレバ、彌陀ノ本願ニ乗テ不退ノ土ニ生シ、見佛聞法シテ、此着心ヲ永ク止ベキヤラン、……一切ノ有爲ノ法ハ夢幻ノ如シト云ヘリ常住ノ着心有ベカラズ、……願クハ是ヲ見ル人、先此記ノ内ノ亡靈並法界衆生ノ爲ニ、光明眞言阿彌陀ノ名號ヲ唱テ、廻向セシメ給フベシト云々」

即ち近世の史家が歴史を専ら倫理的に批判したので對し、中世の史家は専ら宗教的に考察したのである。前者は之を讀まん者が、惡を去つて善に趣かん事を希望し、後者は一見の人々が、この世の無常を悟つて菩提心を發せん事を要望して居る。

中世に現れたる史書の大半は、いづれもかゝる宗教的態度を以て著されて居り、歴史事實の取扱も宗教的であれば、古代上代の史書に對する解釋も宗教的であつた。かの慈鎮の愚管抄の如きは、かゝる態度の最高潮を示すものとして、特に重く視らるべきものである。

「遠クハ伊勢大神宮ト鹿島ノ大明神ト、近クハ八幡大

菩薩ト春日ノ大明神ト、昔今ヒシト議定シテ世ヲバモ  
タセ給フ也。」

といふ歴史の宗教的信頼は、彼の兄兼實の日記玉葉に屢々現るゝ所の、世運の轉變に際する神佛の憑依と全く一致し、當時の史觀の一面を語り、中世の特色を示すものである。

この特色あるが故に、中世の史書は、近世の史家の無下なる一蹴を拒み得る。中世人は近世人とは異なつた價值判斷をなし、異なつた理想をもち従つてその目的に到達せんが爲に異なつた努力をなし、一言にしていへば、異なつた世界に住んでゐたのである。

もとより中世には、上代の傳統を追ふ公家文化が、猶一部の憧憬を夢のうちにつなぎ、又近世の先驅をなす武家文化が、新興の勢を以て既に活潑に動いてゐなければならぬ、しかもこの兩者は、いづれも一世を蓋ふ力なく、一代を照らす光なく、し

かのみならず、それ自身に於いてさへ十分の充足なく、屢々自ら安んずる事が出来なかつた。而してこれら二つの流よりも、更に力強き底流として常にこの二つを否定し、この二つを吸収したものは、實に宗教文化であつた。今その宗教文化が前二者を否定し、自らに於いて人生の歸趣を示す様を、日蓮をして語らしめよ。

「雲上ニ交テ雲ノビンヅラアザヤカニ雪ノタモトテヒルガヘストモ、其ノ樂ミヲオモヘバ夢ノ中ノ夢也、山ノフモトノ蓬ガモトハツ井ノ栖也、玉ノ臺錦ノ帳モ後世ノ道ニハナニカセン、小野ノ小町衣通姫ガ花ノ姿モ無常ノ風ニチリ、樊噲張良ガ武勇ニ達セシモ獄卒ノ杖ヲカナシム、サレバ心アリシ古人ノ云ク、アハレナリ鳥ベノ山ノ夕煙ヲクル人トテトマルベキカハ、末ノ露モトノ雫ヤ世ノ中ノチクレ先ダツタメシナルラン、先亡後滅ノ理リ始テ驚クベキニアラズ、願フテモ願フベキハ佛道、求メテモ求ムベキハ經教也、」(聖愚問答鈔)

又道元はその莊重超脱の風姿を以て、這箇の理を左の如く道破した。

「しかあれば すなはち、をしむにたごひ百計千方をもてすこいふこも、つひにこれ塚中一堆の塵も化するものなり、いたづらに小國の王民につかはれて、東西に馳走するあひだ、千辛萬苦いづくの身心をかくるしむる、義によりては身命をかくくす、殉死の禮わすれざるがごこし、恩につかはるゝ前途たゞ暗頭の雲霧なり、小臣につかはれ、民間に身命をすつるもの、むかしよりおほし、をしむべき人身なり、道器となりぬべきゆゑに、いま正法にあふ、百千恒沙の身をすて、も正法を參學すべし、いたづらなる小人と廣大深遠の佛法と、いづれのためにか身命をすつべき、……しかあれば祖師の大恩を報謝せんごこは、一日の行持なり自己の身命をかへりみるごこなかれ、禽獸よりもおろかなる恩愛、をしんですてざるごこなかれ、たごひ愛惜すごも長年のごもなるべからず、あくたのごこくなる家門、たのみてごまるごこなかれ、たごひごまるごもつひの幽棲にあらず、むかし佛祖のかしこかりし、みな七寶千子をなけすて、玉殿朱樓をすみやかにすつ涕唾のごこくみる、糞土のごこくみる、これらみな古來の佛祖の、古來の佛祖を報謝しきたれる、知恩報恩の儀なり、（正法眼藏）行持

恩愛は禽獸よりもおろかであり、家門は猶塵あぐたの如くである。玉殿朱樓は涕唾に似、また糞土の如くである。忠孝節義すらも、死後將來の暗澹をいかにせんや。公家の文化もこゝにくつがへり、武家の文化もこゝにたぢろぐ。それらは究極する所、無價値である。價値あるものは何であるか。ひとり宗教である。これこそは廣大であり、深遠であり、これこそは無價の寶珠であり、無上の光明である。かくの如きは實に中世を支配した所の思想であつた。

これよりこの宗教思想が、中世に於いて他の文化にいかにか働きかけたか、他の文化がこれによつていかに屈折したかを見てゆかう。

第一には公家文化である。上代に榮へたる公家文化は、美を最高の價値とした。當時源氏物語がもてはやされたのは、その主人公が容貌美しく情緒やさしく、小説の筋も美しくければ、之を行

文章も亦美しいが爲であつた。しかるに中世に入つては、宗教文化の威壓する所、それらの美はすべて涕唾の如く、糞土の如く、そのみにては到底獨立して價値を主張する事が出来なくなつた。是に於いて、源氏物語は節を屈してうちに宗教の寓意ありとし、かろうじて名譽を維持する事が出来た。これは予が既に前の論文に於いて説いた所であるから、重複を省いて新規を擧げ、こゝには専ら夢浮橋の卷の名の解釋を例示しよう。中世の中頃四辻善成の著はした河海抄には、夢浮橋の卷の名を、字義について左の如く説明してゐる。

「大方此物語のおこる心ざし、全く色にふげり言をかざるにあらず、唯無常迅速のこまはりをあらはし、盛者必衰のおもむきをしらしめんが爲也、今の題目を案するに、先夢云はむなしき心也、有無の諸法いづれも夢にあらず云事なし、涅槃經には生死無常は猶如昨夢云説き、大圓覺經には始知衆生本來成佛生死涅槃猶如作夢善男子如昨夢故當知生死及與涅槃無起無滅無來

無去、唯識論にも未得眞覺常所夢中故佛說解生死長夜さあり内外の經書に此夢に付てさまざまの義あり、……次浮橋といふは伊弉諾伊弉册尊天浮橋の上にして共爲夫婦し給て陰陽をさだめ洲國を生せし我國の始也、是みな男女のならひよりおこれり、……されば浮橋は生死のおこり煩惱の根元也、夢は世間出世の法皆如幻如夢也云心也、無相の理也、是菩提也、煩惱即菩提生死即涅槃の義此名にあらはれたり、作者己燈の分すでに爰にあきらかなる者歟」

又この卷の名が、詞より取らず、歌より出でざる事に就いては、ついで現れた一條兼良が、その著花鳥餘情に、四句に料簡して、左の如く釋して居る。

「凡五十四帖の卷の名に四の意有、一には詞をさり、二には歌をさり、三には詞と歌との二をさる、四には歌にも詞にもなき事を名させり、天台の教に四諦の法門あり、一は有門、二は空門、三は亦有亦空門、四は非有非空門也、一切の言教はこの四諦にいでず、これによりて故四諦外別立法性をも釋せり、眞實の道理は

言教の外にあるべき物也、」

是等の説は決して河海や花鳥の専有ではなく、その前後の注釋書に多く共通であつて、それ故にいよく中世の風潮を代表するものである。

これは源氏物語が、上代のまゝの意味に於いては、もはや權威を失墜した事を語る。それと同じく權威を失つたものに白氏文集がある。白氏文集は源氏と相並んで、否それ以上に、上代にもはやされた。當時文集といへば白氏文集であつた事貴族は頻りに之を愛誦して多く暗記してゐた事は餘りに有名な話である。光源氏の如きは、須磨の流に際してさへ、琴にそへて白氏文集を手離さなかつた程である。それ程に尊重せられた白樂天も、中世に入つて宗教の日光に照らされては、

「しかあれども佛道には初心なり、晚進なり、いはんやこの諸惡莫作、衆善奉行は、その宗旨、ゆめにもいまだみざるが、こし、」

と批評せられ、未だ佛法のところをふまず、佛法のちからなきもの、あはれむべくおろかなる至愚なりと、破斥せられてしまつたのである。（正法眼藏諸惡莫作）源氏が同様に斥けられざらんが爲には、必ずや宗教的寓意をそのうちにもち來らざるを得ぬ。上記の解釋は實にこの必要よりして生じたのである。而して之を近世の初めに於いて、源氏物語が別の立場より一氣に排斥せられたつたのと對比する時、時代々々の相違は一層明瞭となる近世の代表としては、こゝに山鹿素行と山崎闇齋とを取らう。素行は武教小學の末にいふ、

「近世之俗、教女子之學、皆以源氏伊勢物語等之俗書、甚可歎息乎、此等之書、以浮佚之事爲樂、以悠艶之事爲專、或書女子之通別夫、或記人情之所及、……必不可令玩味之、」

又闇齋は大和小學の序にいふ、

「世の人のたはぶれ、往てかへる道しらすなりぬるは源氏伊勢物語あればにや、けんじは男女のいましめに



つくれりといふ、たはぶれていましめんこや、いこあやし、清原宣賢が伊勢物語は好色のこころをしるせれご禮をふくむものあり、義をふくむものあり、孔孟業平地をかへばみなしからんこいふ、かゝるひがごころよしあしいはんも口おし、つちのえいぬのこし、あづまにあそび、藤のながしのもごにて、かの物語をそしりければ、うれしくもいひつき、ほゝゑみて、小學こそ人のさまなれば、男のみならはんかは、されごまなしらぬ女はよみがたかるべし、そのさまを、かなにやはらげよきて、しるられにける、筆のちからもなく、ふくろにひこまきをも、たづさへねご、いさゝか、立教、明倫、敬身の目をたて、やまご、こま、もろこしの事をおもひ出るにまかせて、書付侍る。」

上代が美を追求し、中世が聖に歸趣し、近世が善に朝宗したる有様は、この一點に於いてすら、極めて明瞭ではないか。

第二には武家文化を見よう。勇躍進むを知つて死を怖れず、死して猶且敵を亡ぼさんとする猛氣は、武士の本分とする所である。この故に平清盛

は、最期に臨んで遺言して、

「今生の望は一事も思ひおくこころなし、只思ひおく事にては、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこころこそ、何よりも又本意なけれ、我いかにもなりなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも立つべからず、急ぎ討手を下し頼朝が首をはねて、我墓の前に懸くべし、それぞ今生後世の孝養にてあらんするぞ」〔平家物語〕

といったのであるが、中世人は之に安んずる能はずして、平家物語は之を「いとゞ罪深うは聞えし」と評した。楠木正成の最期に於ける七生報國の誓すら、太平記の記者は、之に宗教的色彩を多分に加へ、或は「抑最後の一念に依りて善惡の生を引くといへり、九界の間に何か御邊の願なる」といひ、又「罪業深き惡念なれごも」といつてゐる。結城宗廣の最期に、

「我已に齡七旬に及びて榮花身にあまりぬれば、今生に於ては一事も思ひ残す事候はず、只今度罷り上りて遂に朝敵を亡ぼし得ずして、空しく黄泉のたびに赴きぬる事、多生曠劫までの妄念となりぬご覺え候、され

ば愚息にて候大藏權少輔にも、我後生を弔はんご思はゞ、供佛施僧の作善をも致すべからず、更に稱名讀經の追責をもなすべからず、只朝敵の首を取りて我墓の前に懸け雙べて見すべし、」

といつて、刀を抜いて逆手に持ち、はがみをしつゝ死ぬや、太平記は之を批評して、

「罪障深重の人多しこいへごも、終焉に是程の惡相を現するごは、古今未聞かざる所なり。」

といひ、遂に宗廣を地獄に墜ちたとして了つた。但し若しこれらはいづれも武士以外の者の批評であつて、武士自身の關知する所でないといふならば、熊谷次郎直實の入道して蓮生坊となり、遠藤武者盛遠の出家して文覺となつた事、北條時頼、時宗以下の、多く剃髮して佛道に參し、武田信玄上杉謙信等のいづれも入道して法衣をまとひ、軍陣の間頻りに願文を神佛にたてまつた事を擧げよう。殊に足利尊氏が内心の不安に堪へずして、切に神佛の冥護を祈り、宗教にすがつて安心を得

んとした事の如きは、中世に於ける武士文化の、到底宗教文化に抗敵する力なかりし事を明示するものではないか。かの刑罰が保元以後急に苛酷嚴烈となつた事は、以て武士的文化の進展を卜するに足るが、同時に武家の法律が神佛の冥鑒を目標に置いて定められ、裁判に當つて湯起請及び火起請が盛に用ゐられた事は、宗教的勢力の強大さを示すものではないか。又中世に入つて教訓書の俄かに多く現れた事は、意志的なる時代精神を反映するものではあるが、しかもそれらの教訓書すら猶宗教に吸収せられ勝であつた事は、かの十訓抄が、或は

「すべて凡夫はさる事にて、佛神に能く信をいたし奉るべし、不信の者、昔より災殃にあたる類多し、」

といひ、又は

「かゝれば二世の望を遂げんごも、直しき心にはしくべからず、」

といひ、又

「この思ひをしもしるべにて、まことの道に入るさいふこそ、生死涅槃も同じく、煩惱菩提一なりけることわり違はざりけり」と覺ゆれ、」

なごといつてゐる事によつても考へられ、殊にその末尾の文章に、宗教味の横溢しながら方丈記を思はせて、「夢なり幻なり、古人去りて歸らず」といひ、「常なくうつり行く世の中を聞き見るに、瀧つ岩瀬の浪の、速に流れ行きてとまらざるにこそならず」といひ、「あだなるかりの宿なれば」といふを見れば、思半に過ぐるものがあらう。又蛤の草紙を見るに、その最後は

「後々も此さうし見給うて、親孝行に候はゞ、かくのごとくにさみさかえて、けんたう二世のねがひ、たちごころに叶ふべし、まづけんぜにては七なん即滅し、さはりもなく、しゆにん愛敬ありて、すゑはんじやうなるべし、後の世にては必佛果を得べき事疑なし偏におやかうくにして此さうしを人にも御よみきかせあるべし、」

と結ばれて、親孝行の道德さへ、そのみにては

あきたらず、必ず宗教的効果を期待した有様を窺ふ事が出来る。

武家の興起は中世に於ける最も重大なる現象ではあつたが、しかもその意志力を主とする獨特の文化も、常に宗教文化に威壓せられ勝であり、宗教に朝宗して始めて十分の満足を見出したのであつた。それが宗教文化より獨立し、否むしろ之を壓倒して勝ちおほせたのは、確に近世の事である。第三に平民文化を見よう。平民文化が發展し來つたのは、いふまでもなく近世の事ではあるが、しかし中世に於いて既にその曙光を認め得るのであるから、今それが如何なる性質のものであつたかを検討して、近世のそれと對比せしめるならば中世文化の基調は一層明瞭となつてくるであらう。

こゝに近世に於ける平民文化の一例として、淨瑠璃をとり、而してその先驅を中世に求めて、淨

瑠璃の名の出づる所、かの淨瑠璃姫の物語十二段草子をとらう。

十二段草子に於いて注意すべき事は、その宗教味の横溢である。主人公が峯の薬師の申し子である點も宗教的であれば、淨瑠璃御前や文珠御前の名も宗教的であり、殊に美はしさ賢さの最高級の譬喩は、すべて宗教界の例を取つてゐる事、左の通りである。

「嵐に花のさそはれて、汀の波に浮みしを、物によくく譬ふれば、八功德水の池の面の、百千萬種の寶蓮華も、いかでかこれに勝るべき、（二段花ぞろへ）

「孔雀鳳凰桐竹に舞ひあそびければ、さながら極樂世界もかくやらんこ覺えけり、（同上）

「月西山に傾けば、光も影もかすかにて、花は木の間に散りしきて、色も匂ひもみちくして、琵琶のおこ、琴の音すみわたり、惡業煩惱の雲はれて、極樂淨土もかくやらん、天人も天降り、菩薩もこゝに影向なるかこ思ほしくて、（四段そこの管絃）

「あらあやしや此ミのは、觀音勢至の化身かや、普賢

文珠の再來かや、釋迦の御法かおほつかな、筆をこりてのたやすきは、弘法大師ミ申すも、これにはいかで勝るべき、（六段使のだん）

又義經が帶ぶる刀の裝飾を見るに、

「御腰の物のけつこうには、腰胸金をいれさせて、表の目貫は正八幡ミおほしきに、うらの目ぬきは北野の天神、（五段笛のだん）

「御佩刀のけつこうには、……表の目貫の結構には、八月十五夜の月の光のくまなきに、俱利迦羅を彫らせたり、裏の目貫の結構には、九月十三夜の月の光のくまなきに、鞍馬の毘沙門天をほらせたり、（同上）

之に對して淨瑠璃御前の居間の光景は如何。

「あたりを靜にながむれば、かすくの聖教さも散らしてぞ置かれける、まづ一番に天台は六十卷、俱舎は三十卷、噴水經は四十卷、淨土の三部經、華嚴、阿含方等、般若、法華ミ打ちみえて、數をつくして置かれたり、草紙にこりては古今、萬葉、伊勢物語、源氏、狭衣、戀盡し、和歌の心をはじめこして、鬼のよめる千島文まで、おつり散らして置かれたり、朝ゆふよめるミおほしくて、白銀の机に、金泥の法華經は、一

部八卷二十八品、なかにも五の卷には女人成佛と説かれたり、ここに提婆品にて要文あり、六のまきには壽量品、七のまきには藥王品、八のまきには陀羅尼品あそばしかけてぞ置かれたる。(七段しのびのだん)

殊に第八段枕もんだう、義經が淨瑠璃御前を口説くところに於いては、戀愛も宗教の是認を求めねばならなかつた。

「いかにや君、佛も戀をめさるればこそ、……男女和合のなまけをば、いかでかそむきたまふべき、煩惱すなはち菩提なる、生死すなはち涅槃なり、一佛皆善根淨土と説くまきは、谷の朽ち木も佛なる、萬法一如まきくまきは、峯の嵐も法の聲、諸法實相と觀すれば、佛も衆生も一つなり、佛法になぞらへて、多くの詞をつくされける。」

しかるに近世の代表的作家近松門左衛門は、同じ題材を取扱つて源氏十二段長生島台を作つたがそれにはかくの如き宗教的色彩殆どなく、口説の所に少しく宗教的辯證を襲用しても、直ちに之を打消して、

「女房達は後ろより、扱々まだるや便々も、それは昔の忍びの段、今此粹な世の中に、何かは入らぬ是々も冷泉十五夜しかたにて、もさかしがれば、」

といつてゐる。時代の相違はこゝに明白である。

中世に於いては淨瑠璃は宗教にひきづられ、近世に入つては之より獨立したのである。而して之に代つて近世の淨瑠璃を特色づけたものは、勸善懲惡の道德的意向である。同じ近松の作である日本武尊吾妻鑑には、改心して兩眼を抉つた皇子に向ひ、武彦が、

「眼が有てさへ善惡を見知らぬ物、盲目めくらになつて何の徳」

といへば、皇子は、

「尤々身の惡行を顧み、本心を改め、曇りし眼をくり捨て、世間は長夜の闇なれ共、心はさへたる月夜の如く、善も惡も見分くる、今こそ誠の目明なれ、……ミ、鬼畜を欺く邪見心、始めて妻れ先非を悔ひ、わつミ叫び入給へば、扱は誠の善心ぞも、皆々袖をぞ絞りける。」

なごゝあつて、さながら倫理道德の宣傳とさへ見られる。かの袈裟御前の哀話が、平家物語には宗教的に取扱はれ、而して林羅山には道德的に取扱はれた事は、前論文にも指摘して置いた所であるが近松もその鳥羽戀塚物語に之を道德的に脚色して袈裟を孝行貞節兼備の女性とし、

「扱はかなや、ていじよの道をたてんごすれば、母の命をころんご云、又かうくのみちをたてんごすればふかきいもせの道たゝず、ごすればかゝり、かくすれば、あないしらぬ我身やな、ア、うらめしきはうき世の中、しよせんたゝみづからがつまの渡の身がはりに、たつよりほかは有まじ、」

と決心させて居る。

以上考察する所を綜合して、中世に流れたる種々の文化の系統のいづれもが、すべて自ら安んぜずして、争つて宗教に參入し、宗教の色彩を帯び信仰の口調を有つて、始めて自己存在の意義を確認し、自他共に満足するに至つた事は明かである

現代が科學の萬能を叫んでひたすら眞の發見に熱中するに對し、又近世が道德の至上を説いて専ら善の實現に努力したのに對し、又上代が藝術を尊重して美を最高の價值としたのに對し、古代が眞善美聖未だ分岐せず、渾然として統合融和した純粹の精神であつたのに對し、中世は聖を以て最高無限の價值とする宗教全盛の時代であつた。中世文化の基調は實にその宗教的思想にある。これこそ中世に於いて、最も力強く文化の底を流れ、最も燦爛たる光を文化一般に投げかけたものである。くりかへしていへば、中世は聖を以て最高至上、絶對無比の價值となす文化世界であつた。それは實に、神祕くひびの夜に咲く青い花であつた。

（昭和三年十二月六日）